
死神HEROS

角野のろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神HEROS

【ZPDF】

Z2875G

【作者名】

角野のろ

【あらすじ】

「ねえ、君、ヒーローになりたくない？」目の前にいるミステリアスな少女はそつやつて僕に返答を求める。代償と対価、それに見合つだけの生き方。そして、僕はその生き方を選択する……

プロローグ（前書き）

今作は大学三年目に書いたものになります。一年の頃と比べると書き方が若干変わっているのかな……？

上手くなつたのか下手になつたのかはまだ判断できません。こちらもいすれ、完全版にしたいところですが、ものぐさなため何時になるかは返答できません。

自分の紡ぐ大切な物語、一つ一つを大事にしたいですね。

プロローグ

「ねえ、君、ヒーローになりたくない？」

田の前にいる少女は退屈そうな欠伸をして、それから僕にそんな言葉をかけた。彼女の容姿は十四、五歳といったところで、上から真っ黒な布を一枚被つただけというような、実にシンプルな姿だつた。胸元にはアクセントとして真紅のリボンがあり、その瞳は深い緑色だつた。片手には彼女の細腕でちゃんと扱えるのか、思わず疑問を持ちたくなるような大鎌を携えていた。それは話に聞く死神が持つ鎌そのもののように見える。

ヒーロー……。それは、困った時に呼べば必ず助けに来てくれる、あのヒーローのことだらうか。

「フフフ、そうだよ。代償は簡単、君の魂を差し出す」と、ようするに命を貰うということだね、どうだい？」

そんな大して重要でもない物を対象にしているように、あくまであつさりとした口調で少女は続ける。その際、もしかしたら心の中を読んでいるのではないか、そう思わせるような奇妙な感覚があつた。

「それを渡せば、本当にヒーローにしてくれるんだね？」

「うん、でも力を使うのは君自身だから。君は本当にヒーローになるつもりなの？」

興味もなさそうに、そんな含みのある声色で、少女は尋ねた。どういう訳だか、彼女に試されている、そんな気がした。

「こんな僕の魂と引き換えに、ヒーローになれるなら、幾らでも」それが本心なのかは分からぬ。けれど、僕の口からすんなりと出た言葉はそれだつた。

僕がヒーローという名の英雄に憧れたのは、神様の起こしたほんの少しの気紛れ、とでもいうような本当に些細な出来事がきっかけだった。

それは誰にでも起こりうる、ちょっとだけ運が悪くて、その連鎖が続いておかしくなつてしまつた、ただそれだけのこと。

他愛のないことからみんなから仲間はずれにされるようになつて、最初は話しかけてくれた子たちも次第に離れて、最後には誰も僕のことを気にしないようになつた。声をかけても相手にはしてくれなくて、いつも独りぼっちだつた。

寂しかつた。寂しかつた。切なくて逃げたかつた。

そんな僕の悩みを彼は問答無用で切り捨てて、助けてくれたんだ。「お前は我慢しなくていい。ただ、助けて欲しいって願うだけでいい。答えを出すのはお前だ」

苦しんでいる人が目の前にいて、それを見つけたら颯爽と現れて助けにくる正義の味方。あくまでその人にとっては当たり前に当たり前すぎて、平凡で退屈な日常なんだろうと思つ。

けれど、そうやつて人に助けられることに對して免疫のなかつた僕にとって、それはあまりに巨大すぎる非日常で。いつか僕もああやつて、誰かを助けられる存在になりたい、つて感じた。

その願いは次第に大きさを増していき、気がつけば心の底からの願いになつた。

そして今、自分はよつやくにして、その望みを叶える資格を、機会を与えられた。

人とは違う、特別な能力。空を飛ぶことや、時を操ること、ケガをしないようになつたり、普通より素早く動ける身体能力を得たり、今までの僕には出来なかつたことが出来るようになるということ、

それは誰かに認めてもらえたこと。そうしたら、自分はヒーローになれる。

少しは学んだ。人が一人だけで成せることなんて、たかが知れていて、もっと大きなことをするにはお金やら権力やら、そういうたくさんの人や物が必要なんだって。でも、僕はヒーローに憧れた。

その羨望にも似た感情を自分の心象世界の内だけで済ませてしまえるのなら、どれだけ楽だったのか。人に迷惑をかけることもなかつたのだろう。

気持ちばかりが先にたつて、何も出来なくなることがある。そんな日々の連續。正直、髪が抜けるくらいまで頭をかきむしって、それからコンクリートに身体ごと思いつきりぶつけて一生を終えたくなるような気分になる毎日だった。

それでも決して諦めなかつた。今はその時じゃないだけだ。いつか、その時が来るんだって、待ち続けた。機会を得た今、どうやら待ち侘びた甲斐はあつたみたいだ。

僕の望みはただのエゴなのかも知れない。でも、それが確かだと分かるまで夢を見るくらい良いじゃないか。誰にそれを否定する権利があるっていうんだ。理解されたい訳じやない、ただ認めて欲しかつた。

「今朝未明、 県 市 にて、四日前より行方不明になつて
いた さんがバラバラ死体になつて発見されました。 さんの
遺体の状態から怨恨の線が疑われ、何らかの事件に巻き込まれたも
のと見て捜査を続けています。また最近、起きた事件との類似性か
ら同一犯の犯行ではないかと 」

僕が力を手にして幾人目かの命を救つたその数日後、周囲では小
さな異変が起こり始めていた。近所で行方不明になる人間が続出し
た。ニュースの中でしか耳にすることのなかつた出来事が自宅から
ほんの数キロ離れただけの場所で、しかも立て続けに起こつたのだ。
それはあきらかに普通ではなかつた。その時になつて自分はようや
く、非日常が自分にとつての日常になつたことを実感した。

事件が起きる前に何も出来なかつたことが悔しくて歯を食いしば
る。しばらくすると、どこからともなく女性特有の高めの声音が聞
こえてきた。

「君はこの事件をどうにかするつもりなのかい?」

「うん……、このままにはしておけないから」

どうやら、声の主はあの鎌を持った少女のものだらう。当然のこと
と、といつよつに僕が答えると、姿の見えない少女はどこか嘲笑す
るような雰囲気だつた。別に自分のことなんだから関係ないだろ、
と心の中で抗議したくなつた。

「それにしても、物好きだね。こんな得にもならないことにわざわ
ざ飛び込もうとするなんて。徳が大事つてことなのかな? ……ま
あ、いいや。自分のことは自分で決めるがいいよ」

事件を起こした犯人を見つけること自体はとても簡単なことだつ
た。

そこで何があつたのか僅かでも残つた痕跡を辿ることで、その場

所で起きた出来事を脳内で追想することが出来たためだ。それは死神から得た力の一つだった。

力を使おうとする瞬間、夜間の車両からの強烈な光を浴びた時に似た衝撃を受け、続いて身体を揺さぶるような電撃が走った。その時、脳内で再生された映像の断片は驚くべきものだった。

争つ一人の男、もつれ合つて取つ組み合いをしている……と、一方が起き上がり何かを呑くように口を動かす　すると、変化が起る。男が姿を変えたのだ。ボコボコと肉体の表面が泡立つようにならざる。生身の状態から重金属のようなガチガチとした体表面になつた。そして気絶したのか起き上がらない、もう一方の男を軽々と抱え上げると、容姿の変わった男はフローリングの床めがけて予備動作なく、思いつきり叩きつけた。

……思わず、耳を塞ぎ、口をつぐんで目を背けたくなるのを、グツとこらえる。顔をしかめたとしても何も変わらない。ただ我慢して最後まで見続けることにした。それが僕の使命だから。何があつたのかを知ることで、次の事件を起こさないようにする責務がある。ただ、そう感じた。

また、事件の当事者を他人事で片付けられない理由の一つに男の容姿が変化したことがあつた。

「ねえ、君はあの変身をどう思う?」

「やつぱり、変身つて名付けていいのかなあ」

死神の問い掛けに、ポツリと独り言のよう呟く。あの男の容姿は僕がかつて憧れた、テレビの中で悪をやつつけるヒーローの変身後みたいだった。

「彼はどうやって、変身できるようになつたんだろう」

「そりや、ヒーローつていつたら変身するものでしょ「うが」「どこか茶化すように、少女は言つた。冗談のつもりだろ「うか。」

「あれは、僕の望むヒーローの形じゃない」

「そもそも、ヒーローの定義つてどうつけるんだい?」

「それは
」

返答に困った。ヒーローってなんだろ？。

「そうだ、今度君も変身するといよ」

「え？？」

「あれ、説明しなかつたっけ？　君も出来るんだよ？　変身」

「……本当？」

今となつてはどつちでもいい事実だつたりする……　ような？
そして僕は単身、残された氣配を辿り、"変身"した男の元に向
かう」とした。

「我が名はダークネス、暗闇を駆ける夜の支配者」

今は姿を硬質化させた仮面の男は自身のことを、そう名乗った。全身は爬虫類か昆虫のような皮膚に包まれ、首には赤いスカーフを巻いていた。その傍らにはバイクがあり、移動手段として使つていることが分かつた。

「こんなことを続けるのはもう止めるんだ！」

「何故？」

僕の制止の言葉に対し、さも、当たり前のことだろう？ とでもいうような様子で問い合わせる男に対し、それを正そうとして更に言葉を投げかける。

「何故って。君のしていることは絶対に人の道から外れているよ、酷いよ……」

「……酷い？ 僕は父を母を妹を……家族を殺された。犯され、弄ばれて、その復讐のために僕は力を望んだ。しかし、復讐を果たした今は、むしろ手に入れた力を使うことの方が楽しくなってしまったんだ。善を行つために必要な力は善だけなのか？ 悪の力を借りることは間違つているのか？ 過程などは重要ではない、その結果が重要なのではないか？ たとえ志が高くとも、結果が伴わなければそれは意味がないことではないか？ それとも自己満足で十分だというのか？」

「……、」

何か返そうとして口を開けるも、そこから音は何も洩れなかつた。目の前にいる仮面の男ダークネスの問い合わせに対する返答を、なんと答えるべきか、自分には分からなかつた。

「答えを出すのはお前だ」

そう、ダークネスは捨て台詞を残すと、バイクにまたがり、颯爽

と消えていった。僕はその言葉をかつて誰かから聞いたことがあったな、と緩慢に思いながら膝をついた。空は暗雲たちこめ、ポツリポツリと雨が降り出す。爆ぜて落ちる雨が唇と頬を撫でた。

「世界の崩壊までのカウントダウンは始まっているんだ。でも、誰もそれを止めようとはしない。何故だか分かるかい？　自分が大切だからだよ。誰も護つてくれる人なんていない。最後に信じられるのは自分だけだよ」

……これは、かつての僕だ。そう、自分の力だけでは幾ら頑張つてもヒーローになることは出来ない。そんな風に自暴自棄になつていた頃の、ほんの数日前の自分だ。ガクガクと膝が震え、今にも崩れ落ちてしまいそうなくらいに不安定だ。

「……うーん、随分と屈折した考え方をお持ちのようだね。そんな風にしていて疲れはないかい？」

この女の子は誰だつて？　最近知り合つたばかりののような気もするし、ずっと前から知つていた気もする。彼女の表情は一方的に随分と親しげな様子だつた。

「別に」

僕はぶつきらぼうに返答する。会話すること自体が億劫でめんどくさいみたいだつた。

「そうかい。ふん、ならば、まあ、いいとしようか。それはそうとして、私は死神なんだ。一応、君の魂を刈りに来たつてことになるのかな？」

「僕は今すぐ死ぬの？」

あの頃の僕はそれでもいいかな、と思つていた。

「うーん、返答次第かな。どっちにしろ、魂はもう「」とになるんだけど、その過程が重要。えつと上手く説明するにはちとボキャブラリーやら技量不足が否めないけど」

「という訳で　ねえ、君、ヒーローになりたくない？」

そして、僕は特別な力を得ることになる。

「僕の望みは間違っていたのかな。何かを成さなくてもただ生きるだけで良かったのかな……」

膝の震えが止まらない。自分が正しいのか、正しくないのか何も見えなくなつていた。否定されることは身を削る拷問のようだつた。「生きることは綱渡りみたいなものだよ。こんな不安定な足場はそうそうないからね、何が確かに何が不確かなのか、それすらも不安定なんだから」

そういうと、死神はクスリ、と笑う。何がおかしいと/orのだろう。死神に対し、僕は問い合わせることにした。

「ねえ、君は自分の今いる場所は正しいのか、疑問に思つたことはない? 僕は時々思うんだ。今とは違う、別的人生もあつたんじゃないかなつて。ただ、その疑問はまた同時に今の自分を否定することもあるんだ。だから、あまり考えないようにはしてるけど「でも、時々考えちゃう、と?」

「うん」

「弱いんだね、人間つて」

その言葉に返答をしない僕に対し、死神は次のように続けた。

「君は信念という言葉の意味を考えたことがあるかい? 信念、それは信じ、念じること。望みが叶うこと信じ、そして念じる。信じたいことは多すぎて、でもその内、本当に信じていいものは限られている。そう、例えるなら爪楊枝の先っぽくらい……かな。だけど、疑うことなくそれらを最期まで信じ続けられること、それがその人間にとつての信念と言えるんじゃないかな」

「……ふ、」

もし、彼女が死神だと仮定して、けれど死神にしては随分と庶民的な考え方だな、と思った。マジメな答えだけど、それはいつもの

ひょうひょうとしておどけた様子とはかけ離れていて、誠実だった。そのギャップに思わず噴き出してしまった。けれど、それが自分の欲しかった答えだったのかも知れない。気がつけばずっと続いていた膝の震えは止まっていた。

「今の自分にでも、出来ることはある……のかな」

「さあね、でも諦めるよりその生き方はずっと大変なことだと想つよ。それに、そうだね……自分という存在を認められるにはどうしたらいいかな？ 強くなりたいとか、志を持ちたいとか、そんなことははつきり言つて、どうでもいいことなんだよ。自分が自分らしく生きるにはどうしたらいいのか。一生をかけて、人はその答えを追い求め続けるんだ。見つからないことの方が多いらしいけどね」

その時、僕は理解した。あのダークネスは自分のもうひとつ可能な性だということに。自分も家族を殺されたら、同じように復讐を望んだかもしない。最後の最後で自分が正しいか、正しくないかを証明できるのは自分自身しかいない。

……でも、もし、自分が正しいか正しくないかを認識できていないものにとつては、そもそも何を証明すればいいのかも不明瞭である。

でも、僕は僕だ。他人じゃない。闇とは違う、でも光でもない。そう、僕は夜を駆ける黒き馬、夢の魔族、ナイトメアとなろう。

窓ガラスに映る自身の姿は今や憧れるヒーローのものとなつていた。全身が銀色のボディーとなり、一部にアクセントとも言える紅いラインが走る。胸にはブルーの明滅する発光体があった。力強く雄々しく、自身の望むヒーローの姿になつていた。

間違つた世界を前にして、間違いを理解しても認めずに真っ向からぶつかってボロボロになる者。

間違つた世界を認めて傷つるのが嫌だから、何もかもから逃げ出してそのために傷つく者。

どちらにせよ、矛盾している。

「自己犠牲ほど汚いものってないと思うよ？ 残される人の気持ちなんて、まったくの無視なんだからさ。まあ、だから他を省みない自己犠牲なんだろうね」

時は真夜中、今は使われなくなつて、取り壊し間近の廃ビル。辺りに人の気配はなく誰にも知られることなく決着をつけるには、まさに最適な場所だった。そう、そこがダークネスとナイトメアの決着の地だつた。その屋上で、二つの魂を両の掌に乗せて足をゆらゆらとさせながら、死神の少女は暇を持て余すように言葉遊びに耽つていた。まどろむように、至極のんびりと。

あぶなっかしく思えるが、彼女にとつてはそんなことは水を飲むこと、食事をすること、眠ること、それくらいに身近過ぎる事柄であり、死は彼女にとつて常に隣に存在するものなのだ。もう闘いは終わつたのだ。激しい闘いは確かに存在した。二つの命が互いの主張、感情、意志をぶつけ合い、散つていつた。ただ死神にとつてその決着は日常茶飯事といえるほどのもので、ここで語らなくても別にどちらでも良いことなのだろう。

人気がない。にんきがない。ひとけがない。大人気ない。だいにんきない。大きくひとけがない。おとなげない。

フフ、コイツは面白いや。人気がないから、人気がないんだなあ。で、大きく人気がないから大人気がなくなる、と……。

「これは全部、他愛のない死神の戯れ事なのさ」

自嘲するような死神の呴き。空を見上げるとそこには猫の瞳のような満月があつた。

「死神HEROS」（終）

Hペローグ（後書き）

どうもこんにちは。角野のろです。あとがきです。今回の小説は「ヒーローってなんだろう?」をテーマに考えて書いてみることにしました。ヒーローとはいっても善とか悪とかそういうことは関係なくて、自分の考える“何か”に対してまっすぐ生きている人がヒーローなのかな、って思います。“何か”は未だに分からずじまいなんですけど（苦笑）ヒーローっていうのは、その人その人によって、違つてどんなやり方でもその人に影響を与えた存在はヒーローつていえるのかなあ、なんて。

ただ、分かりやすいヒーローのイメージとして仮 ライーとウ トランをモチーフに使わせていただきました。自分はどちらかといえば、後者派です（笑）

同人サークル「E s y a n - s f a c t o r y」はのんびり製作進行中です。今も「猫神」完成に向け、切磋琢磨しております。ご興味を持って下さった方はとても嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2875g/>

死神HEROS

2010年10月8日15時48分発行